［レポート］

地域で活きるパフォーマーの話 vol.1

2013 年 6 月 2 日（日）＠ 古書カフェ・くしゃまんべ

語り手： 三原 貴嗣（へんも）

［フットバッグパフォーマー、真宗興正派 善照寺住職／香川県在住］

はじめに

全国をみわたしてみれば、自分がパフォーマンスをするだけではなく、自身が暮らしている地域に根ざした独自のスタイルで面白い活動を行っているパフォーマーの方々があちらこちらに見受けられます。このトークシリーズでは、その方々が関東に来るタイミングにお時間をいただき、地元での活動を中心に、考えていること思うことについてのお話を聞いたり、意見交換できる場をつくっています。

語り手の活動に関心のあるさまざまな方々に情報が届くように、またご参加いただけなかった多くの方々にもお話の概要を共有できればと、このシリーズでは当日のお話をもとにレポートを掲載して記録を積み上げていく事にしました。（ただし、その場にいた参加者たちとのライブな出来事とするために、質疑応答でのやりとりについては掲載しておりません。ご了承くださいませ。）

それでは、香川県・丸亀で住職としてお務めを果たしながら、フットバッグのパフォーマーとしても活動している三原 貴嗣（へんも）さんのお話をお楽しみください。

Koen 企画 奥村優子

三原 貴嗣 Takatsugu Mihara

1982 年 4 月 12 日生まれ、香川県丸亀市在住。2002 年からフットバッグを独学で始める。大学卒業後は一般企業を経て善照寺を継ぎ、住職となる。ジャグラーで副住職でもある弟とともに、地域のお祭りやイベントへの参加、地元クラブでの指導、ワールドジャグリングデーin 香川の運営など様々な活動を行う。瀬戸内サーカスファクトリーによる創作サーカス『20 歳のパレード』『100 年サーカス』公演出演。ジャパン・フットバッグ・チャンピオンシップ 2011 男子フリースタイル部門優勝ほか受賞歴多数。

http://www.facebook.com/zenshoji

本人からの内容紹介

東京や大阪などでおこなわれる都会的なイベントやパフォーマーをとりまく環境と、田舎でのその“あり方”とは大きなスタイルの違いがあるように感じます。香川県に住みながら、いろいろな活動をしている現状や実感、それをとりまく環境についてお話したいと思っています。

第1回目にして、かなり特殊な事例だということは自覚していますが、本業である僧侶として、パフォーマーとして、アスリートとして、どのような活動をしたり考えたりしているかをお話して、さまざまな意見を交換できる場にできれば嬉しいです。

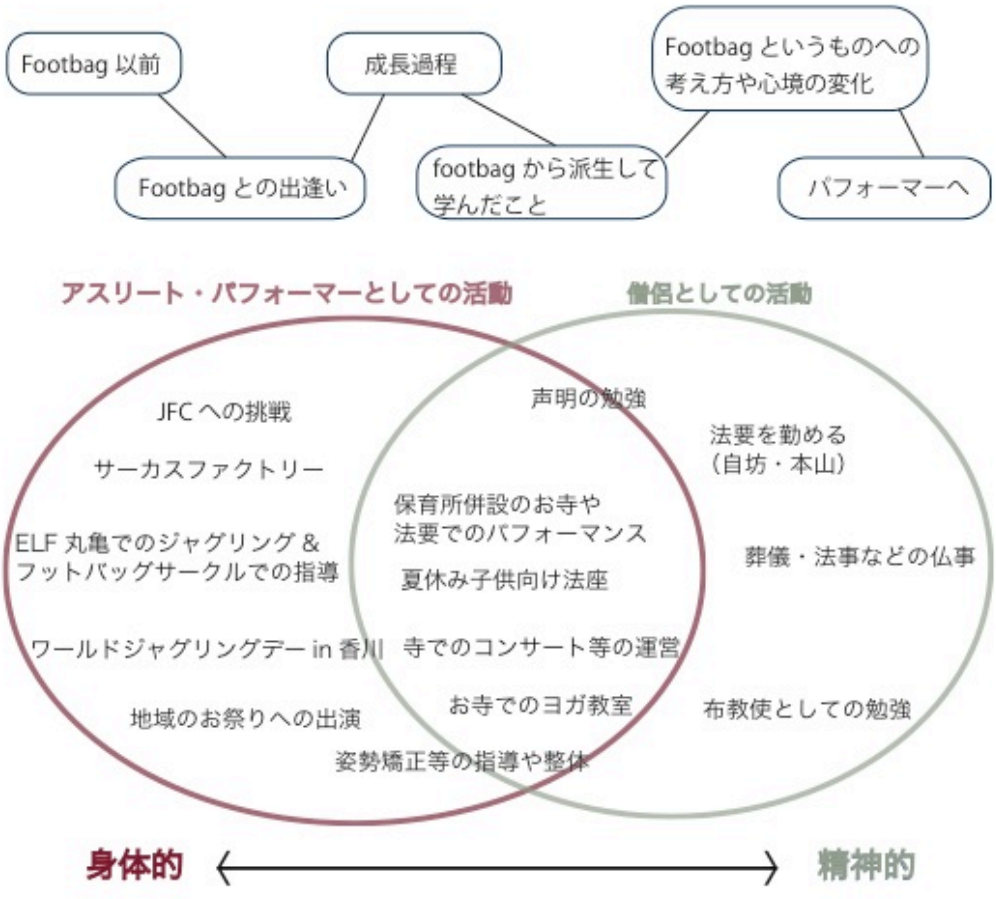
◆参考資料

トークカフェ『地域で活きるパフォーマーの話 vol.1』香川県編

2013 年 6 月 2 日（日）19:00
古書カフェ くしゃまんべ
企画制作 koen 企画

自己紹介

■三原 貴嗣　Takatsugu Mihara
1982 年 4 月 12 日生まれ、香川県丸亀市在住。2002 年からフットバッグを独学で始める。大学卒業後は一般企業を経て善照寺を継ぎ、住職となる。ジャグラーで副住職でもある弟とともに、地域のお祭りやイベントへの参加、地元クラブでの指導、ワールドジャグリングデー in 香川の運営など様々な活動を行う。瀬戸内サーカスファクトリーによる創作サーカス『20 歳のパレード』『100 年サーカス』公演出演。ジャパン・フットバッグ・チャンピオンシップ 2011 男子フリースタイル部門優勝ほか受賞歴多数。



自己紹介

こんばんは。高校の時からのあだ名で皆からは「へんもさん」と呼ばれていますが、本名は三原貴嗣（みはらたかつぐ）と申します。1982 年生まれ、今年で 31 歳になりました。

まずは本業についてですが、僕は四国の右上にある香川県の丸亀市というところにある、真宗興正派 善照寺というお寺の住職をしています。自分で21代目の住職になります。住職継承の式典をお寺の庭、本堂で行いましたが、その時に地元の方や他のお寺の住職方もたくさん集まって頂いて、とても賑やかな催しになりました。「お寺に行く」というとお参りに行くとか、お悔やみごとみたいなイメージかもしれませんが、お寺でも結婚式とか「住職新しくなりました法要」とか「本堂を新しく建てたよ法要」とかおめでたい法要もたくさんあるので、そういったことも今日はご紹介をしていきたいと思います。

フットバッグとの出会い

そしてこちらが今日呼ばれた理由なんですが、自分はフットバッグというスポーツを、20 歳からもう 11 年続けてやっています。「フットバッグ」といってもどういうものかご存知の方も少ないと思いますので、まずはご説明したいと思います。

「フットバッグ」は柔らかくて小さいお手玉みたいなものを足で扱うスポーツです。僕とそのフットバッグとの出会いは大学2年生の時でした。東急ハンズのジャグリングやマジックのグッズが置いてあるコーナーに、外国のパフォーマーがフットバッグをしている演技のビデオが延々と流されていたんですね。その時に初めて観て凄くカッコよくて「なんだこれは！」と衝撃を受けました。それまでに一度も観たことがないし、テレビで取り上げられているのも見たこともない。20 歳になった記念に新しいこと始めたいなーと思っていて、ジャグリング等にも少し興味はあったんですが、すでに上手な人がたくさんいて、今からやっても追いつけないんじゃないかとかいろいろ考えた結果。フットバッグをやってみることにしました。

インターネットがちょうど普及しだした頃だったので「どのくらい日本でやってる人が居るのかな？」と検索したらその時に3人しか見つかりませんでした。関東に2人（東京と埼玉）と大阪に1人。それしかネット上でフットバッグをやっている人が発見できなかったんですが、そのとき大学が神戸にあってそこに通ってましたので、その大阪の 1 人に連絡を取って「一緒に練習させてもらえませんか」とコンタクトをとったのがはじまりです。

当時は Youtube もなかったし、ネット上にもそんなに動画がなかったし、参考になるものがありませんでした。なので最初の頃は東急ハンズに通って延々と動画を観て、そのイメージを覚えて、家に帰って夜の公園でひたすら蹴る。けどさっぱり分からない、という日々が続きました。その大阪の人は時々アメリカに行って色々な技を知っていたので、一緒に練習して教えてもらったり、少ない動画をコマ送りして観たり、道具自体もよくわからなかったのでひたすらコツコツ研究していくしか方法がなかった状態でした。

フットバッグと出会ったころはそういう感じだったのですが、それでも続けられた理由としては、自分の中に功名欲みたいなものがあったんじゃないかと思います。これは高校の時のバンドの経験なんですが、皆がほとんど知らないバンドの曲を演奏したら、自分たちのライブを通して多くの人がその曲やバンドを好きになってくれたことがありました。そういう「自分たちが活動したことで関心を持ってくれる人がたくさん増えた」という経験があったから、日本の中で誰もやっている人がいないフットバッグを自分が始めて上手なプレイヤーになることができたら、何かの拍子に日本中に広まった時に自分が先駆者的な扱いになれるんじゃないか。ビデオに出ているようなスター選手に、自分がなれるんじゃないかと思ったんですね。

実際、2002 年からフットバッグを始めて、2003 年にはペプシがフットバッグのキャンペーンを始めて、海外の格好いい動画が一瞬テレビで流れたりして、ちょっとだけフットバッグが全国的に広まった時期があったんです。その頃から試合ではまあまあ上位をとれていたので、本当にスポーツ選手としてフットバッグをやっていこうと思っていたこともありました。

練習を通して得たもの

「フットバッグを教えてくれる人」が誰もいないので、ずっとうまくなるためにはどうすればいいんだろう？ と、常に試行錯誤していました。練習方法や道具にしても、いろいろなことを自分で考えたり吸収していきながらやっていかないと、全然うまくならないんです。当時は平日は5–6時間、土日になると大阪の人と8–9時間くらい練習する日が続いていたんですが、そうなると身体のつくりの問題が出てくるんですね。疲れがとれないとか、怪我をするとか。そういうことが問題になってくるので、継続していいパフォーマンスをしようと思った時に、どうやって疲れをとるか？ 休息をとるか？ 怪我をしないようにするかがけっこう課題になってきました。

そこで身体のことを知るために、大学の修学旅行でタイのバンコクに行って、タイの古式マッサージを勉強することにしました。現地にあるマッサージの学校に入ったのですが、そこにはタイの方だけでなくいろいろな人がいて、なかにはヨーロッパから来ている人もいました。学校では布団がたくさん並んでいて、2人1組になって、1日の半分はマッサージを受けて、残りは人にマッサージをする。身振り手振りでコミュニケーションを取りながら、実際の経験を繰り返しながら、身体のことを学んでいきました。

それと、体調管理や栄養管理にも気を遣うようになりました。どうやって身体ができていくのかを考えると、食事とか料理とかも大事ではないかと。食べたものがそのままカラダになっていくわけだから、と考えているうちに栄養学を勉強するようになりました。料理もするようになって、けっこうレパートリーも増えて、自家製の薫製とかも作るようになったり（笑）。

凝り性な性格が垣間見えたかと思いますが、こうしたこともフットバッグでやっていく中で、覚えたことです。

それと、フットバッグを研究していくなかで、ひとつの物事が上達していく課程を身体で知っていったことで、他ジャンルのことでもある程度何とかできるようになるような感覚を得たように思います。それは、わからないことを上手くなっていく課程といいますか、どう勉強すれば覚えたり知っていけるのかという…新しい事の学び方ですかね。わからないことにひたすら突き進んでいった結果、身についたことだなあと思います。

地元でのフットバッグと自分の現在

今はこのフットバッグを使って、いろいろなパフォーマンスを地元でもやっています。実は僕には弟がいまして、ジャグラーであり、またお寺の副住職なんですね。なので、お寺に関しては兄住職、弟副住職で運営していて、時には兄フットバッグ、弟ジャグリングで「善照寺ブラザーズ」というコンビでパフォーマンスに行くという、変わったお寺をやってます（笑）

地元も活動する場所はいろいろあって、僕の卒業した保育所の園長先生から「来てくれませんか」と言われてフットバッグとパフォーマンスをしたり。高松の宮脇書店さんのビルの屋上でお祭りがあるのですが、そこで前座としてパフォーマンスをしたり。体育の日のイベントとして、フットバッグ体験教室を地元の子どもたちにやったりもしています。あと今は「エルフ丸亀」というNPO 法人の児童クラブでも教室を持っています。小学校 2～4 年生までの男の子 4 人がいるのですが、そこで弟はジャグリングを、僕はフットバッグを教えています。

2 度の転機

僕はずっとフットバッグはスポーツにカテゴライズされるものだとしてやってきましたが、2年前に少し考え方が変わる出来事…出会いがありました。

それは丸亀市にある猪熊源一郎美術館という美術館の 20 周年祭として 2011 年 11 月 23 日に行われた、サーカスアーティストの金井圭介さん監修による『20 歳のパレード』という公演でした。コーディネーターの田中未知子さんとたまたま知り合いになった事がきっかけで出させてもらったのですが、この田中さんは「サーカスが大好きだ！」という方でして（笑）。もともとは北海道のご出身なんですけれども、瀬戸内国際芸術祭の仕事で香川県に来られた時に香川の風土や民俗芸能なんかの文化的なものをすごく気に入って、そのまま香川県に住み着いたんです。フランスと行き来をしていて、フランスのサーカスの事についてもすごく詳しいし、そこの広報みたいな事もしていたり、サーカス全般のコーディネーターをされている方です。

そして金井圭介さんは、今は長野にお住まいなんですけれど、世界各国でさまざまな活躍をされているすごい方です。その人の指導のもと『20 歳のパレード』は上演されたのですが、出演者は金井さん、ダンサーの平井優子さん、香川県三豊市出身のエアリアルパフォーマー・長谷川愛実さん、僕と弟の5人と地元のミュージシャン・アキノキリン荘でした。僕たち以外の方はプロでやっているアーティストの方ばかりで、長谷川さんの“ティシュー”と言われる布を使ったパフォーマンスやコントーション（軟体芸）などは、生で観ると身体表現としてすごくて、本当に美しいとしかいいようがないというか。圧倒されました。そういう人たちと一緒に公演を行った事、金井さんの演出を受けた事が自分の中では第一の転機になりました。

その翌年に『100 年サーカス』という公演が 2012 年 11 月 3 日にあり、これが

第二の転機になりました。同じく田中さんがプロデューサーで、目黒陽介さんというジャグラーの方が総合演出を担当した創作サーカスでしたが、高松にある「ことでん」という地域の私鉄の車両工場（現役）が会場なので、機材を全部ハジに寄せて、半円形のステージと電車と客席を作って、上から空中芸の道具を吊るして…というとても大掛かりな公演でした。（ダイジェスト版の映像が公式サイトで公開されています。）

出演者はプロのミュージシャンが5名、パフォーマーもフランスのサーカスアーティストから東京の有名なパフォーマーがたくさんが集まっているという凄いメンバーの中に、僕と、うちの弟と、地元ジャグラーの藤田くんと言う人が高松からは出演していました。しかも僕はジャグリングはまったくできないのですが、リングジャグリングを全員で行うシーンがあったので必死で練習しました。しかも、その練習を我が家の本堂でやっていました（笑）。これは音を出してもジャグリングを練習してもいい練習場所がなかなか見つからなかったので、床に固いリングやクラブを落としても傷つかないように畳を敷き詰めて、座布団も総動員して、その上で練習をするという…。そうした工夫で場所や時間を作って練習して、どうにか本番で披露することができました。

心境の変化

僕はここ数年ずっと、フットバッグの世界の評価としてフットバッグの試合で勝つ事は大事だけど「フットバッグを広めたい、皆に認知してもらいたい」と思った時に、その勝ち負けのベクトルだけでは無理があるんじゃないかと考えていました。たぶん普通の人がフットバッグの練習風景をみても味気ないし、複雑で何をやっているのか分かりにくい。すごいの

はわかってもらえても、2分くらい観たら大抵飽きられてしまって、好きじゃないと30分見続けるのは難しいのだろうと思います。そんな中で自分が作品やパフォーマンスの一部として出ることで、だんだんその考えが変わっていくと同時に、アスリートとしてやっていくことと、パフォーマンスとしてやっていくことに大分違いがあるということに気がつきました。

そして「フットバッグを知ってほしい！」と思ってアスリートとしてやってきた問題意識が、「作品の世界観を表すなかで自分の果たす役割は何か？」という新しい観点を得て「フットバッグを見せるものとして扱うにはどうすればいいんだ？」という風に変化していきました。フットバッグをプレイして楽しむ人間が増えなくても、自分がステージに出ることで「フットバッグって面白そう！」と興味を持ってもらえたり、意味のあるものだと考える人が増えるなら、それも良いんじゃないかなあと思うようになってきました。

ほかにも具体的な変化で言うと、たとえば衣裳がアスリートチックなものから少しカジュアルになりました。フットバッグをスポーツとしてやっていた時は、スポーツ用のハーフパンツやTシャツでパフォーマンスをする事が多かったんですが、公演で衣裳としてシャツとか普段着っぽいものを着たことで、そういうかたちでやるのも重要な事だなと思ったんです。

ワールドジャグリングデーin 香川

それともうひとつ、今までは「ジャグリングや他のパフォーマンスをフットバッグと一緒にしないでくれ」という思いがあったんですけれど、それも変わってきました。弟が主宰しているワールドジャグリングデー（WJD）in 香川というイベントがあって、これは自分も一緒に参加して運営しているものなんですが、2011年までのWJDは弟が主催の練習会

みたいな、ジャグラーのためだけのイベントだったんです。でも2012年からは商店街で大道芸もやって、一般の人にジャグリングを知ってもらおう、ジャグリングを使って表現する事を観てもらおう、そういうところに観点が移動してきました。チラシもポスターも作って、広報にも力を入れるようになりました。

写真を見るととても人がいますけれど、この商店街も普段はほとんど人がいないんですよ。端っこから端っこまで見渡しても1〜2人とか誰も通ってないことすらあるのに、通れなくなるくらい人が集まって。商店街の人も「こんなに人が集まったのは久しぶりや」と、お客さんがたくさん集まってきてくれて喜んでくれました。地域の活性化にもなるし、自分たちの活動が何かしら役に立ってるなーと実感できて僕らも嬉しいです。

その他のパフォーマー活動

レジュメ下半分に自分のやってきたことをまとめているんですけれども、紹介してきたのが赤丸の円の部分（アスリートとかパフォーマーとしての活動）です。

補足しますと、まずこのJFCというのはジャパン・フットバック・チャンピオンシップという日本のフットバッグの大会の通称で、これに挑戦もしています。2011年に久しぶりに日本1位になって、2012年は2位でした。そこでは一応、人に言えるような順位を取るというのを目標にやっております。

それと瀬戸内サーカスファクトリーと言うのは、これからもっと地元高松や香川県を中心にサーカスで地域を盛り上げていこうという、田中さんが中心となっている活動です。さきほどの『20歳のパレード』や『100年サーカス』公演は、その活動の一部だったんです。今もこれのメンバーとして参加しています。

あとは地域のお祭りへの出演がいくつかありますが、これは「善照寺ブラザーズ」という名前で弟と2人でやってます。弟もずっとひとりでジャグリングをやっていたんですけれど、一緒にそういう作品に出してもらって、少し彼も思うところがあったみたいでして。コラボレーションする事がどういう事かも学んでいるし、共通のイメージもあるので、兄弟2人でやる事をいろいろ考えてみたりとか、今はしています。ここまでが現状やっているパフォーマーとしての仕事ですね。

僧侶としての活動

こうした活動と平行して僧侶としての活動がある訳なんですが、これはほかのパフォーマーの人とは違った特殊な立ち位置になると思います。パフォーマーは各地を回ったり放浪のイメージがありますが、お寺は歴史も地盤もあるし、地元に根付いていて僕たちのことを知っている人も多いです。

それと、これは自分の考えではあるのですが、基本的な業務である葬儀や法事などの仏事、春の永代経やお盆のお務め等は、一般の感覚だと意味が分かりにくいとことだ思うんです。なんかわからんけどお務めをしたり、なんかわからんけど拝んで、亡くなった人が向こうの世界でどうにかなってるのか、役に立っているのか。漠然とよくわからないでお金がかかって、結局得るものも特にない…と。そういう感じだから今の若い人はお葬式離れ、お寺離れということになっていってるんじゃないかと思うんです。でも、そもそも式をすることは、集まった人たちが「自分の人生って何なんだ、生きるって何なんだ」を考え直す場所として昔は機能していたはずなんです。

お寺の仕事をしていて、他の人にはあまりないかもしれないけれど自分には強く感じている事があります。それは人間は本当に死ぬんだなあという事です。

今日も本当はお葬式が1件できてしまって、昨日お通夜に行って今日お葬式だったんですけれど、このトークイベントもあるし別の法事もあるから、それを弟に任せて東京に来たんです。通常向こうで何かがあった場合は、イベントをキャンセルして葬儀に出るとかいうかたちになります。実は『100年サーカス』のリハの時にも1件急なお葬式が入ってリハーサルに参加できたのが前日の19:30過ぎでした。本当に予定なんてあるようでないもので、人が亡くなるのはいつの事かもわからないですし、でもすごく自分の日常に隣接しているものなんです。

不思議な気分…というかなんともいえないのは、外がむちゃくちゃいいお天気で、とてものどかな日に、お葬式はあるんですよ。雨で曇りでどんより寒い日にお葬式をやってつらい、というのはすごく似合うんですけど。そんなこととはまったく関係なく、天気もよくて気温も最高でピクニックでも行こうぜ。っていう時に、僕はお葬式から火葬場に行くとか…。

当たり前に過ごしている日常の中に、突然人が死ぬ事があるっていうのがものすごく実感としてあるんです。皆、頭では「人間いつか死ぬんだ」って思うし、口でも言うんだけれど、実はあんまり自分が死ぬって思っていないんですよね。この立場にいるとそれを凄く感じるようになります。そうした体験から思うことは、自分が亡くなるポイントはいつかわからないな、と。明日かもしれない、明日飛行機で帰る時に飛行機事故で死ぬかもしれない、ということも本当に考えるんです。

けれども、そういう時にせっかく今与えられている身体とか心とか、そういうものを全部「死ぬ」というポイントまでに使い切りたい。というのが自分の人生目標なんです。だからこの僧侶としての活動も、アスリートやパフォーマーとしての活動も、今動く身体を最大限に使っていきたい。年齢的に無理が出てきて、トレーニングしても若い人たちについていけない時がいずれ何処かに来ると思うんですけれど、そうなるまではずっと続けていきたいと思います。

もうひとつ精神的な面の話なのですが、動物と違って人間には深い精神世界があって、自分の人生の生きる意味や生まれてきた役割を考えるところがあると思うんですよね。そういう自分の心の働きや精神というものも使い切って、亡くなる時には「もうやることがないな」という状態で死ねたらいいなって思ってます。お寺とか長い歴史の中で見たら自分も中継点のひとつだし、そんなに大事な役割かどうかわからないけれど、生まれてくるところから自分の意志で生まれてきた人はいない訳です。全部与えられて何かの縁でできてきた人生だから、そのチャンスを活かしたいなと思ってます。

レジュメの中で、下の方に身体的とか精神的とか書いたんですけれども、この精神世界の話をするとか、思想としての話をするってなかなか難しいですね。皆それぞれ生まれてきて考えて生きていて、我が家の宗教がどうだとか、いろいろな考え方があると思うんです。だからいきなり信仰の話は難しいと思うんですが、でも仏教とは何か？ っていうと、僕としては生きる上でどういうものの見方をしていくかというひとつの思想、ものの考え方として学んでもらったら良いと思うんです。

レジュメの右の方の僧侶としての活動は、多分とっかかりがすごく難しいと思います。そこが法事とか葬儀とか、人が亡くなって、ショックを受けたり、非日常的な時間ですね。自分や家族にそういう出来事がなければそもそも機会もないですしね。逆に図の左の方、WJD であったり、いろんなパフォーマンスに僕ら兄弟が出演するいうのは、一般の人に関心を持ってもらったり、とっかかりやすいところだと思ってます。ぱっとみて楽しいとか、すごいっていうものをやって、そのうえで「あのひとお坊さんなんやで」というのは非常にキャッチーであると、自分ではけっこう自覚してます（笑）「そういう面白い坊さんの話ならちょっと聞いてみようかな」とか「あの人のおるお寺やったらちょっと行ってみようかな」とか「いま話題の善照寺やで」とか（笑）。実際、そういう感じで皆が訪ねてきてくれるようになったり、若い人が関心を持って、うちの寺に足を運んでくれたりするんですね。入口として、間口を広げるためでもあるというか。

本当は、いろいろ聞きにきてほしいんです。なんかうまくいかない、とか皆自分の人生にいろいろと悩みがあると思うんですけれど、仏教の話には何かしらの回答や発見があるものだと思います。その時全部解消はされないかもしれないけれど、何かしらてがかりになったり落ち着いたりすることがあると思うので。そうしたきっかけの入口になれば良いなと考えています。

お寺でのイベントについて

あとは、僧侶とパフォーマンスの中間的な活動として、お寺と言う場所を使っていろいろな催しをやってます。たとえば本堂でのヨガ教室。これはヨガの先生を別に呼んで来てもらってるんですけど、近所の人や檀家さんなどいろいろな片が参加してくれています。さらにヨガの先生の方で別の先生を呼びたい、となって別の WS をやったりすると、また 4-50 人人がわらわらと来たりして。直接うちの寺とは関係ないんですけれど、こういう場所でやる事に意味を持ってくれる人もいるんですよね。

それと毎年、夏休み期間の 8/10 にお寺としての行事があるんですけれど、その前日に子ども向けのわかりやすい法要やお務めを一緒にしています。お寺は楽しいんだよ、という感覚で帰ってほしいと思って、知り合いの人にミニコンサートをやってもらったり、マジシャンの人にマジックショーをやってもらったりもしています。こどもたちは一度来だすとけっこう慣れてくれるので、近所の子と檀家さんの子が一緒に遊んでいたりします。大人の世代で「お寺に勝手に入っていいのか」とか「どうやって入ったら良いのか」とか、もうそういうところからわからなくなっている人が多いんですよね。もっと気楽に来てくれて良いんだよ、とこちらは思っているから、それをかたちにしてわかりやすくしたいと工夫しています。

2012 年の 8/9 には紙飛行機の教室を開きました。香川県に二宮忠八という、ライト兄弟より先に飛行機の構造を開発してた人が居たんですが、その歴史的な背景をもっと盛り上げたいということで、航空力学を利用してわかりやすくこどもたちに飛行機の事を教えるという内容でした。発泡スチロールを薄く切って重りをマスキングテープでちょっとつけた鳥形の飛行機を作ったんですが、パッと話すとふわーっとすーっと飛ぶ飛行機で、子どもたちも新しいものを見たというかすごく楽しそうにやってました。

また、別の活動ですが、これも外部講師に依頼してディベート教室を開催しています。たとえば子どもたちに「これどう思う？」って何か質問しても、さあ？とか別に・・・。とか、そういう答えが返ってくる事も多いような気がします。たぶん何かしらは心に思ったり感じていることがあっても、それを人にわかるようなか

たちで説明するような経験やトレーニングを受けてない子が多いんでしょう。このディベートの教室は、午前中に発声練習やグループで遊ぶことなどをして、子どもどうしも慣れてきて声や言葉を出した後に、午後からディベートをするというかたちでやっています。ディベートでは賛成／反対／ジャッジの3チームにわかれて、ひとつの論題に対してそれぞれのチームが「こう思う」という意見や論拠を出してもらい、それをジャッジが判断するという形式をとっています。そういうディベート形式のゲームをすることで、子どもたちがどんどん自分の意見を言うようになってきて、これがすごく彼らの成長には役に立っているという実感があります。最初来た時には自己紹介でもボソボソっと喋っていたのが、本当にむちゃくちゃ喋るようになるんですよ。「それは違うと思います！」くらいに夕方には喋るようになっていて、意味がある活動だなあと思ってます。

ただし、そういう時でもここはお寺なので、おうどんを昼食に取りながら少しお話しを聞いてもらっています。食べ物に関するお話や、「いただきます」の前に食前の言葉というものが各宗派にあるのですが、それを皆で言って、食事の意味などを意識してもらいます。メインのディベートとは別に子どもたちに“お寺で”何か学んだということを、覚えてほしいと思ってそういう時間を利用しています。

あとは、お寺でコンサートの運営もしています。これはすごくラッキーなご縁なのですが、古澤巌さんという、葉加瀬太郎とバイオリンブラザーズという活動をされていたり、グラミー賞や海外ツアーも多い日本のトッププロのヴァイオリニストの方がうちの本堂でコンサートをしてくれることになったんです。ですので、ライティングもステージも全部自分たちで考えて工夫して作って、客席も本堂に座布団席をパンパンに詰めて 130 席くらい用意しましたが、本当にチケットが一瞬で売り切れました。そのコンサートの前にも、僕と弟でお務めとご挨拶をして「これはコンサートだけれどもお寺に参っているんだよ」というのをコンセプトとしてきちんと出したうえで、コンサートを楽しんでもらっています。

それと最後に。お寺って古くさい、汚い、ださい。というイメージを払拭するべく、自分でデザインして発注して、「善照寺 T シャツ」も作ってみました（笑）。うちのお寺は源頼朝とも同じ笹竜胆（ささりんどう）という家紋なんですが、それをレイアウトしています。今日は持ってきてませんが、欲しい人はネットでも売ってます。ただ、実はあと 2-3 枚しかないんですよ。50 枚くらいつくったんですけれどほとんど売れまして。今日、持って来ようか迷ったんですけれど、この機会に売るとちょっとセコいかなと思って持ってきませんでした。欲しい人は早い者勝ちです（笑）。

おわりに

えーと、そんなところでお時間も来ました（笑）。ひととおり自分の活動についてお話ししてきましたが、今後は簡単に入れるところから、ちょっとお寺に関心のある人、そして本当に仏教の話を聞いてみたいと思ってる人まで、幅広いニーズに対して間口を広げているという、そういう状態にしたいなと思ってます。

それというのも、「都会に出てパフォーマンスをする」っていうことは、僕らはもう無理なんです。僧侶の本業やお寺を放ってどこかに行くっていうことは、自分たちにとっては難しいことで、逆に地元の中でできること、自分の与えられた環境の中で最大限やるってどういうことなのか。を考えながらやっていこうとしてます。だからパフォーマーとして活動することも、お坊さんとして活動することも、相互にいい結果を出しているなと自分では思っています。

檀家さんには「お寺さんそんな事するんや」っていうギャップがあるし、初めて会う人が「あの人お坊さんなんや、へえ」と、何かしら印象的に覚えてもらえる。それを楽しいと思って会いにきてくれたり、僕らに話を聞きに来てもらえたりすると、もっといろいろな話や活動ができて広がっていけるかなあと。そこに重点を置いてます。パフォーマーとしての活動も、最終的には生き方であるとか、仏教の話ではこういうことだよにつながっていくというか…。

もしかすると今日の話で、聞き手というか受け取り手としては「いやだ」というか、仏教と言うものをおしつけられてしまったような気持ちになった人もいるかもしれません。いきなり信仰というのは難しいと思いますが、物の考え方として、ひとつがわかると、自分の視野が広がるものなんだと思うんです。たとえば、今までの自分の経験で「こうだ！」と思っていたことと、全然違う内容が仏教

の話を聞いていく中で出てきます。そうすると今まで自分が正しいと思ってきたことがポッキリ折られてしまう。でも、そういう経験が何処かで活きてくるし、人間として一段階成長する＝精神世界が深くなっていくことだと思うんです。客観的にいろいろ物の見方ができるようになってくると、「自分はこうしたい」というところに固執しなくなったり、怒りにくくなったりもしてくるんです。「怒る」ってどういう仕組みかというと、自分はこうだと思っている仕組みから外れたことに対してイラっとするんです。けれど、その思い込みこそが最初から問題なんだということがわかっていくと、自分も相手のことも客観的に見れるようになるし、大事に付き合っていける。

今後は自分が頑張りたいと思っていることと同じように、自分の能力を出したいと思っている人をアシストできるようなそんなことをしていきたいなあと思ってます。ありがとうございました。